
姉が過去からやって来たけどRPGの世界に行っちゃった。

ゴリヴォーグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉が過去からやって来たけどRPGの世界に行っちゃった。

【Nコード】

N4322T

【作者名】

ゴリヴォーグ

【あらすじ】

姉の南雲美桜なぐもみおが過去からやって来てから初めてのゴールデンウィーク、姉さんの発明したRPGのおかげでファンタジーな連休に！ハイテンポ学園コメディ、まさかのファンタジーの世界に！でもどこに行ってもこの二人は漫才コンビなんですよね。

拙作「姉が過去からやって来た。」のスピノフ作品です。元ネタも読むと、面白さが倍増するかも。

これまでの粗筋

学校の皆さま方、今年のゴールデンウィークはいかがお過ごしですか？ ある人は8日間世界一周という、じっくり観光も出来なさそうな飛行機ツアーに出掛けたり、またある人は甲子園目指して休み返上で頑張っているかもしれません。また普段バイトに勤んでいる彼も、兄弟姉妹に家族サービスをしている事でしょう。是非ともこの黄金週間を有意義に過ごして、これからの勉学への励みにしてください。

ん？ 先生は何をして過ごしているかって？ それはね……、

「なんで揃いも揃って近接系なんだよっ！ いてっ！ モンスターの癖に弓矢とか生意気だぞ！」

「こっ君どいてっ！ はあああああ！！ エクス、カリヴァー！！！」

「いやその剣ブロンズ製だからね！」

ちょっと人助けをしていました、RPGの世界で。

SISTER QUEST 宿命の姉弟

ここの発端は、

「ゴールデンウィークに旅行に行きたいっ！」

とこねた姉さんが、

「RPG作ったよ！」

「ってことで、僕と姉さんはファンタジーな世界でゴールデンウィークを過ごすことになりました。帰るための条件はただ一つ。

「冥王ハデスを倒し、私の嫁シャニーたんを取り返して欲しい。断れば、ギロチるぞ」

ギロチンをちらつかされたら受け入れるしかないよね。

ハデスを倒すためには冥界に行かなきゃいけないわけでして、

「風の紋章、水の紋章、土の紋章、火の紋章が必要が必要ですな」

「というように、冥界に行くにはこの四つ紋章を手に入れなきゃいけないわけです。四大元素ですね、分かります。」

「ここからだと、風の紋章が一番近いね。まずはそこに行こうか！」

無駄なく動けるルートを発見したので、サブイベントなるだけ無視のサクサクプレイで実家に帰りたと思います。仕事まだ残ってるし……。

その幻想をなんたらこんたら！

駆け出し勇者の姉さんとその騎士の僕は、冥界へのスタンプラリーをすべく、風の紋章を手に入れるために、西方にある風の谷ウインドキャニオンを指すことにする。

「城下街の外はこうなってるのね」

トンネルではなく、大門を抜けた先には、見渡すかぎり草原という、フィールドが待っていました。

「モンゴルの草原みたいだな……」

「確かにそうかも。あれってゲルって言うんでしょ？」

東方には遊牧民でもいるのだろうか、遠めにだけどチラホラと白いテントのようなゲルが見える。

「とりあえず僕らが目指すのは反対方向だね。いずれ向こうに行くだろうし、その時のお楽しみってことでさ」

サクサクプレイが目標なんだ、余計なことはいしなことが吉だろう。

「それじゃあ、レッツラゴー!!」

姉さんは剣を高く掲げて一步を踏み出す。大いなる一步を、『アジャアジャアジャ!!』

「「なんじゃこりゃああああああああああ!!」」

リキシが現れた!!

「ってリキシってなんだよっ！ 初っ端ってスラムが定石だろうが！ なんて最初からニフムが使えなさそうなモンスターが出て

くんだよっ！」

そう、RPGの世界なんだから、モンスターがいて当然だと思っ
ていたが、

『アジャアジャアジャ！！』

「フィールドを歩いたら力士が出て来るってどうゆうことだあああ
ああ！！」

「こつ君、構えて！」

会心のツツコミを繰り返す僕を尻目に、姉さんはブロンズで出来
た剣を構える。

「槍なんて使ったことないって！」

とりあえず、無双の幸村の構えを脳内で再現してその通り構えて
みる。

「なかなか様になってるよ！ それじゃあいくよ！ さあ、懺悔の
時間だあ！」

決めゼリフらしきものを叫び、姉さんは猛スピードでリキシに向
かっていく！

「ダアーツ！」

姉さんの剣が振りかかるっ！

『アジャ』

リキシは……、弓矢を撃ってきた。

「せめて突っ張れやああああ！！」

「きゃあっ！」

いきなりの遠距離攻撃に姉さんは可愛い悲鳴をあげてたじろぐ。
その瞬間をリキシ達は見逃さなかった！

『アジャ！』

リキシの突っ張り！

「させつかよっ！」

姉さんに体重に身を任せた突っ張りをしてきたリキシに槍で突きを入れる。リキシは勢いのまま槍に突っ込んでいき、

『アジャあああ！！』

背筋も凍るような世にも恐ろしい断末魔をあげて消滅していく。

「こっ君サンキュ！ それじゃあ反撃よ！」

姉さんは立ち上がってリキシ達に立ち向かう。僕も槍を構え突進するっ！

『アジャアジャアジャ！』

リキシ達は再び弓矢でこっちを撃ってきた！

「なんで揃いも揃って近接系なんだよっ！ いてっ！ モンスタアの癖に弓矢とか生意気だぞ！」

「こっ君どいてっ！ はああああ！！ エクス、カリヴァー！！」

「いやその剣ブロンズ製だからね！」

気分の問題だろうけど、アーサー王の伝説の剣の名前を叫んでリキシ達を薙ぎ払っていく。

「僕もゲイボルグっていつたらいいのかアーツ！」

リキシがこっちにぶっ飛んで来る。団子を刺す要領で、ゲイボルグ（仮）でめった刺しにする。リキシ団子いっちょあがり！

『アジャあああ！！』

筆舌にしがたい絶叫と共にリキシ達は消滅していく。

「次生まれるときは、友達になりたいものね」

姉さんは雰囲気酔っている。早くも勇者気取りだ。

「姉さん、これっ」

リキシとの戦闘で傷ついた体を薬草で癒す。レベルも低いし、自分の体力がどれだけあるかもハッキリしないから、マメに使うべき

だろう。回復魔法でも覚えたら楽になるのかな。

チャララチャラチャッチャッチャーチャチャラチャッチャッチャ

「ラディツキー行進曲？」

突如頭の中にファンファーレというか行進曲が流れる。

「な、なんなの？」

姉さんの頭にも流れているみたいだ。これは一体……？

「レベルアップ？」

「何故にラディツキー？」

敵を倒したら流れたんだから、おそらくそうだろう。リキシがスラムポジションだとしても、5体ぐらいいたんだ、経験値もそれなりに入るはずだ。

「あんまり強くなった気がしないけどな……」

「最初だし分かりにくいんじゃない？ リキシ相手が楽になったらレベルアップってことで」

改めてステータスという概念の大切さを思い知らされる。

「この辺でレベル上げをしようよ。調度谷までの間に小さな町があるし、そこらを拠点にしよう」

「そうだね。リキシ狩りでもしようか」

『アジャああああ……！』

「姉さん、ずっと気になってたことがあるんだ」

『ウェイへッ！！』

「奇遇だね……、私も一つ納得のいかないことがあるんだ」

『デエエエー！！』

「こいつらお金落とさなくね……」

『アジャああああー！！』

いや、確かに常々おかしいとは思ってたよ？　なんでモンスター倒したらお金が手に入るんだって。

「こつ君、そろそろ薬草なくなるよ？」

「これ宿に泊まるお金ないよね……」

また詰んだ……。

「落とすといったら、こんなばつかだし……」
モンスターを倒すと、お金の代わりになんらかの物を落として消える。

「化粧品でどうしろと……」

例えばリキシをたおすと、何故か化粧品を落とす。実はメスしかないのかな？

「あ、もしかして……」

姉さんは何か思い付いたらしい。

「お金が欲しけりゃこれ売ってことかな？」

姉さんはリキシ印の化粧品を見て言う。

「んな手間がかかること……」

「全部で600Gになりますが売りますか？」

「……、お願いします」

今日知ったこと。モンスターがお金を持つてるんじゃない、モンスターの持ち物売ってお金を手に入れるんですね。ゲームではその作業が怠いから省くんですね、良く分かりました。

サクサクプレイ無理じゃね？

ヤマタノオロチの谷

「……、姉さん」

「あああ、昨晩は激しかったね」

「なあに人のベッドに入りこんどんじゃオンドリヤはあああああ
ああ！！！！」

「あひいん」

昨日は皇帝にギロチンをちらつかされ、絶対に商業ゲームには出せないような、トンデモな敵キャラを狩りまくり、戦利品を売って所持金とすると言われてみたら当然なんだけど、ゲームの中では省略されたプロセスに気づくという偉業を成し遂げた。しかし、気づいた時には日も暮れていたので、宿屋に泊まって明日に備えようという結論に到った。

で、日が明けたわけだ。朝起きたら、馬鹿姉が隣で寝ていたから怒りのゲイボルグキックをかましてやりました。

べ、別にゲイボルグが気に入ったなんてことは無いんだからね！

「まずは情報を集めましょう。城下街みたいに馬鹿AIではないことを祈っておくわ」

「そうだね。んじゃ行きますか」

何事にも情報だ。一に情報、二に情報、三に情報だしね！

「ここはニイの町です」

ニイの町ですか。

「ここはニイの町です」

「二回も言わなくても良いよっ！ ニイの町ね！」

「皇帝に刃向かったらギロチンってホントなのかな？」

「本当です、試しに皇帝に年増と言ってごらん、次の瞬間には君はデユラハンの仲間入りさっ！ マミっちやうよ！」

「西の谷には巨大な蛇が住んでいるんだって！ しかもクビが八つもあるらしい……」

「ヤマタノオロチか？ 恐らくボスキャラな気がする。気を引きしめてかからないといけないな。」

「ぱふぱふしていかなああい？」

魅力的な提案ですが、バニーガールじゃなくて、ババアガールの結構です。

「西の谷だけど、ヤマタノオロチが棲息しているみたいだね。多分そこに風の紋章を守ってるんだと思う」

「ヤマタノオロチ？」

姉さんは聞き返す。説明しなきゃダメか。

「ドラ エにも出てくるんだけど、八つのクビを持った蛇のことだよ。日本神話にでてきて、スサノオに退治されたんだ。にしても、このゲームの世界はやらグローバルだね。ヤマタノオロチとギロチンが同じ世界に存在しているっていうのがユニークだよ」

古事記の世界と、マリーアントワネットが暮らした世界がドッキングしている。他の地域には何が待ってたんだか。

「確かにボスっばいわね。それは燃えてくるわー！」

「それは頼もしい限りだよ。武器屋と防具屋で装備を揃えてから行こうか」

雑魚を狩りまくってお金をそれなりに稼いだ。これだけあれば良い装備を買えるはずだ。

「銅の剣がエクスカリヴァーじゃ格好がつかないしね」

どの剣買っても、あんたはエクスカリヴァーって言うんだろぅな……。

「さあ！ 装いも新たに、ヤマタノオロチを討伐するわよ！」

今の所別にヤマタノオロチの被害とやらを聞いていないんだけどな……。悪さをしてないのに討伐したら、僕らが悪役になるよ。

「人の一人や二人食べてるでしょ」

軽く言われても。そうやって冤罪はこの世に生まれるんだ。僕はヤマタノオロチの人権もとい蛇権を強く主張するね。

「どっちにしろ、風の紋章が必要なんだし、行きましょ」

意気揚々とした姉さんと、一抹の不安を胸にした僕は西の谷へと足を進める。出来れば、ヤマタノオロチとは交戦したくないんだけどな。こう言っちゃなんだが、勝てる気がしないよ。

スサノオ先輩は素直に凄いと思います

「こう君、もういつそこの世界に永久に暮らさない？」

「そうだね。ギロチンなんか逃げ切つたら無問題だよ」

「こう君、この世界には近親婚を禁ずる法律はないよ。やったねこう君！ 夫婦になれるよ！」

「それならギロチるわ」

さてさて、早くも我々諦めモードです。ちよつと前まで討伐してやるっ！ だったり、サクサクプレイとか言ってたんだけど、

『で、どうするっ？』

『いや、ここで仕留めんとか有り得んから』

『俺らの場合はあ、男食うなんて選択肢ないから』

『ウエイヒヒッ！！』

『えっ？』

『おまえらそれでええんか』

『アジャアジャアジャアジャ！！』

『首が痛いんで、帰りますね』

コイツ、倒さなきゃダメ？

ニイの町を越えた所にある西の谷は、人があまり寄り付かないのか、整備されておらず非常に歩きにくい。RPGを引き合いに出すつもりはないんだけど、あの世界の山やら谷はある程度整備されて、御丁寧に道まで出来ている。どれだけこの世界は現実的なんだか。

「なかなか着かないなあ、あつ姉さんしゃがんでっ」

「まだ半分も行っていないと思うよ。どうも、こう君」

戦闘にも馴れてきて、リキシ程度の雑魚キャラなら、会話しながらでも倒せるようになってきた。僕らのコンビネーションも格段に上がっていき、その内合体技の一つや二つ出来るんじゃないかな？

「ごども？」

シバくぞおいしいい！！！！

「もうシバいてるよ……」

空気を読まぬ下ネタには、怒りの鉄槌を！ 姉にや、愛はいらねえ。

「でもさあ、合体技で思い出したんだけど、」

「私たち魔法いつになったら覚えるんだろう？」

魔法いつになったら覚えるんだろう、いつになったら覚えるんだろう、覚えるんだろう、ろう……、頭ん中でリフレインし続ける。

「ホントだああああ！！」

魔法の存在をすっかり忘れていたよ！ おかしいとは思ったよ！ R P Gだというのに、勇者も騎士も、近距離オンリーの M P O なのだ。モンスターを狩り続けて、ラディツキー行進曲も 10 回以上流れた気がするが、一向に魔力だけが上がった気配もないし、そもそもこの世界には魔法なんてあるのか？

「一人旅した 1 の主人公でも魔法は覚えたよね……」

勇者なのに魔法が使えないなんて……。

「なんつうか、夢もファンタジーもありゃしないな」

製作者は即刻謝罪しなさい。

「マジサーセン」

あつ、そついや姉さんだつたっけ？

「魔法はないけど、剣技とか槍術はあるよね。とりあえずそれでヤマタノオロチに挑もつか」

姉さんが言う通り、武器を使った技は出来たりする。特にやる度に命が削られたり、またGも減っていないため、ノーリスクではあるが、通常攻撃より強いぐらいなんで、決定的な一打を与えるには根気強く行くしかないのだ。さらに、その与える割には隙が大きいのもあるので、リトルリターンぐらいはあるかもしれない。

「やあー！」

『アジャあああー！』

「そいつー！」

『ピャーー！』

「ふう、なかなか進まないね」

「ヤマタノオロチはどこにいるんだか……」

雑魚共を斬っては刺し、斬っては突きまくりレベルは着実に上がっていくが、どうもヤマタノオロチのもとに辿り着けない。道を問

「違えたのか？」

「ヤマタノオロチって大きいの？」

「そりゃあねえ。古事記では八つの谷、八つの峰に渡る巨体と言われているぐらいだし」

「確か古事記によると、スサノオは一つ一つの首に酒を飲ませ、寝たところを退治したという。ヤマタノオロチ退治の模範解答があったんなら、酒を持って来るべきだったかと今さらになって後悔する。余談だが、三種の神器として知られる草薙の剣は、ヤマタノオロチの尻尾のなかから出てきたものらしい。退治したら貰えるのかな。」「詳しいね。じゃああれは小さいから違うよね」

「姉さんが指差した方向には、」

「ビンゴ……じゃない？」

「古事記による伝承よりは小さいが、そこには町一つ楽勝に飲み込めそうな八つの首をもつ巨体が、」

『グルルルアアア!!』

雄叫びをあげていた。

「でけーよ!!」

「最初のボステカすぎだろ！ 剣と槍だけで戦えるのか？」

『アジャ？』

「首の一つと目が合ってしまう。なぜカリキシ似だ。恋に墮ちるわけがない。『アジャアジャアジャアジャアジャアジャアジャアジャアジャあああ

「！」

「わああああ!!」「」

リキシ首が叫ぶと同時に、他の七つの首もコチラを振り向く!

「こう君、もういつそこの世界に永久に暮らさない?」

「そうだね。ギロチンなんか逃げ切ったら無問題だよね」

「こう君、この世界には近親婚を禁ずる法律はないよ。やったねこう君! 夫婦になれるよ!」

「それならギロチるわ」

というわけで、我々諦めモードに入ったわけです。初っ端からプーンみたいなボスとか、後のボスはどんなのがくるんだよ……。

「姉さん、気になったんだけど、この世界で死んだらどうなるの?」

「セーブポイントからやり直しじゃない?」

「教会よったっけ?」

「「負けたら最初からだっ!!」「」

こうして、絶対に負けられないヤマタノオロチ戦が始まるのだっ
た!

『でっ?』

ヤマタノオロチの火球!

『どうするっ?』

ヤマタノオロチは毒の液を吐き出したっ!

『俺の時だけ』

ヤマタノオロチは大きくクビを振り回す!

『態度がちいがあうっ』

ヤマタノオロチは噛み付いてきた!

『アジャアジャアジャアジャ!』

ヤマタノオロチは何やら叫んでいるっ!

『ウエイヒヒッ!!--』

ヤマタノオロチは突風を噴き出す!

『クビが痛いんで帰りますね〜』

ヤマタノオロチは帰りたいそうだ!

『いちおっ!--』

ヤマタノオロチは岩を投げてきたっ!

「「2対8は卑怯だろおおお!!--」」

ヒーロー戦隊の悪役の気持ち分かる気がする

二人でヤマタノオロチに挑戦とかムリゲーな件について。

『アジャパアアア!!』

ヤマタノオロチは暴れ回る!!

「無理だあああ!!」「」

無理だよっ! 戦いのトーシロがヤマタノオロチに挑むなんてムリゲーだよ!

「もうやるしかないのよ!」

泣き言を言っても仕方ない。とにかく奴を倒す!

「エクス、カリヴァー!!」

「ゲイボルグ!!」

南雲姉弟の攻撃っ!!

『アジャアアア!!』

ヤマタノオロチのリキシ首を倒した!

「これで相手は七体だっ!」

「この調子で行くよ!」

首を一つ倒したことでこちらの志気があがる。八体いるが、実のところ首単体ではそこまでキツイということはなさそうだ。

「でりゃあああ!!」

『ウエイヒヒッ!!』

「貫け!」

『デエエ』

「ナグモ・ストリーム・アタック！」
『帰りますね〜』

順調にクビを倒していき、相手の戦力を減らしていく。

「イけるよ！ こっ君！」

「うん！ 姉さんも油断すんじゃないよ！」

南雲姉弟の連携も強まり、最初に感じた絶望なんてなんのその、
ヤマタノオロチがむしろコチラに怯えているぐらいだ。

「行けえええー！！」

もう何も恐くない

『かーらーのー！』

と
ヤマタノオロチ（もはやシマタノオロチ）は尻尾を上げたと思う

『アジヤアジヤアジヤアジヤー！』

『デエエ』

『詰めますねー』

『ウエイヒヒッ！ー！！』

クビが再生しました。

「なんでやねええええん！！」

「狡くね？ こちとらホ ミすら無いのにザオ クとか狡くね？」

「また一からのの……?」
絶望は、再び。どうあがいても、絶望。

『と見せかけて!』

『まだまだあるよ!』

『やめてよね』

何回やっても何回やってもクビが復活してしまう。何処かのクビが司令塔になっていて、ラヴ スミたいにそこを叩かなきゃダメだ
と思い、一通りのクビを切っても、パナイ再生能力で、しぶとく復活してしまふ。

「なんでまた復活するんだよ!」

「本体は別のところにあるの?」

古事記によると、スサノオは酒に酔ったヤマタノオロチを切つて、
尻尾を切つたら草薙の剣が……。

「姉さん! コイツの弱点が分かったよ!」

「ホント!?!」

そつだ、コイツの再生能力の正体は……。

「姉さん、カクカクシカジカ」

「ゴメン。全く分かんない」

「だからあーしてこうして……」

「ウツウーウマウマってわけね」

違う気がするけど、まあ伝わったんならそれで良しっ！

「ヤマトノオロチ！ 僕が相手だ！」

槍で切りつけながら奴らの注目を集める。クビが八つあるんだ。全部を引き付けなきゃいけない。

『グワガラゴツシャアアン！！』

筆舌にしがたい雄叫びをあげ、コチラを攻めてくる！

「こつちだよ！！」

ヤマトノオロチは八つのクビを器用に操り、怒涛の攻撃を仕掛ける。よし、この調子で……。

「姉さん、今だ！！」

『！！？』

「オーケー、覚悟なさいっ！！ Eksウ、カリヴァアアア！！」

気付いた時にはもう遅い。姉さんはヤマトノオロチの尻尾を切りつける。堅かったのか剣が崩れてしまうが、

「念願のクサナギソードを手に入れたわ！！」

草薙の剣を手に入れ、勢いよくクビを切りつける！

「順番が逆になっちゃったけど、スサノオスラツシュ!!!」

独特なネーミングセンスとともに、八つのクビを切り落とす！

『アジャアアアアア!』

ヤマタノオロチは消滅して、変わりにメダルのようなものが落ちていた。

「これが風の紋章？ 思ってたのと違うね」

「確かに。2000円のガチャガチャで手に入りそうだもんね」

神聖なアイテムのはずが散々な言われようだ。

「でもさ、風の紋章を無事ゲットしたことだし、さっきからラディツキーが鳴りやまないからレベルも上がったってことで」

「一件落着だね」

風の紋章、ゲットだぜ!!

「さて、どうしようかな？」

「とりあえず、魔法については知りたいね」

ニイの町で身仕度や休憩、後教会でお祈りという名のセーブをした僕は、北にある水の紋章を手に入れる前に魔法について調べようということになった。ヤマタノオロチはなんとかだったが、これからはなんとかならない敵が増えてくるだろう。そうなる前に、魔

法があるなら使えるようになりたいのだ。

「学者のおじいさんなら分かるかも」

冥界への扉の開け方を教えてくれた学者を思い浮かべる。あの人は魔法についても詳しいかもしれない。

「サクサクしたかったんだけど……、仕方ない。城下街に戻ろうか」

「そうだね」

僕らは城下街に戻ることにしたのだった。

魔法少女と言ってきたながら最後の方まで変身しなかった魔法少女もいるんだから

ヤマタノオロチを力業で退け、風の紋章と草薙ブレード（姉さん命名）を右手に、僕達は水の紋章を求め北へ向かう……、前に城下町に戻ってきた。サクサク進みたかったんだけど、まあ無理でしたね。なんせ我々、魔法が使えないんです。明らかに剣と魔法の世界観なのに、戦闘において重要なフクターたる魔法を一向に覚えません。そこで僕らは、学者様に魔法について御教授願いたく戻ってきたのだけど、

「魔法なんて今時流行りませんよ。とうの昔に忘れられた過去の遺産です」

はっ？

「何百年も前に魔法というものは途絶えてしまいました。文献はあれども、私たちにそもそもその素養はありませんでした。ですので、今生きている人間に魔法を使える者はいないでしょうね」

「「なんだってー!?」」

詰んだー！ 滅んでるってありかよ!?

「いや、こう君。こういう時勇者なら、『どうして古の呪文がっ！

！ もしやアナタは……』的な展開があるに決まってるよ!!! 学者さん、文献を見せて下さい!」

姉さんは文献を学者からぶんどると、

「え〜と何々……、太古より在りし超自然の叡智マナは、神の子シヤロンと冥王との戦いのさなか、シヤロンが放ちし赤い光とともに消滅した……、なにこれ、要は世界中のみんなの元気をわけて貰って、神の子とやらの元氣玉展開の果てにみんな力を使い果たしちゃったってこと?」

池上さんレベルに分かりやすい噛み砕きすぎた解説をいれてくれる。

「シャロンはこの惑星の全ての魔力を使い、冥王を封印しました。その後の彼女は、四つの紋章でこの世界と冥界を断絶し、初めからいなかったかのように姿を消したと言われています」

「で、弱まった封印を解いて冥王は姫を攫った、てことですね」
学者さんは頷く。

「そうですね。冥王がそのまま侵攻しなかったのが救いですが、それも時間の問題かも知れませんか」

「だからこそ魔法がいるのに、魔法を復活させる手段が見つからない。八方塞がりか……」。

「魔法はありませんが、もしかしたら、彼なら冥王に対抗する手助けが出来るかも知れませんね……」

「何ですか、それは!？」

「手段を選んではいられない。兎に角今は猫の手にも藁にもすがりたいのだ。さもないと、僕のゴールデンウィークが意味不明な展開のまま終わってしまう!」

「ふむ、ならばここから北にある海辺の聖堂を訪ねなさい。そこであなた方の力となる存在が待っているでしょう。これを持って行きなされ。私の紹介なら彼も快く受けてくれるでしょう」

「学者様は、タイプライターに文字を打ち込み、封にいれヨーロッパにあるような判子で印をする。」

「分かりました。情報提供ありがとうございます!」

「この世界の未来を頼みましたぞ」

「ちょうど北に用があったんだ。新たな力と水の紋章を同時にゲットしてやる!」

やっぱり近接系だけでワルプルギスの夜を迎えるのは厳しいよね。だからって近

魔法がないというRPG失格な世界にきた僕ら。いつまでも剣と槍と薬草だけで戦えるとも思えないので、新たな力とやらを求めて海辺の聖堂に行ったのだ。果たして、何が待っているのやら……。」「海辺の聖堂ってドラクエ5思い出すよね。エスターク前でデータが消えたのも今や良い思い出だよ。そう考えたら復活の呪文の方がましかも」

「えー、覚えきれないよ」

間違えたパスワードを入力して復活できなかったのはいい思い出。某岩男然りパスワードとは相性が悪いのだ。

「ふるいけや かわずとび こむみずの おとばしよ」

「それ適当に言ってるない？ まつしまや ああまつし まやまつし まやばしよ でもいけるじゃん」

「まさか。峰子さんが言ってたから正しいよ」

「なら正しいね」

サブカル関係に関しては峰子さんが言うことは100パーセント正しいはずだ。

「あ、そろそろ着くよ」

地平線の向こうにひときわ目立つ大きな聖堂が建っているのが見える。あれが例の聖堂だろう。

海辺の聖堂は僕らが思っているよりも大きく、歴史を感じさせる建物だった。ところどころ朽ちているのが長い年月を過ごしたということを物語っている。

「おじゃましまーす」

国民的RPGの世界と違って、住居に勝手に侵入するのは不法侵入にしかならないので、まずはいるかいないかの確認をする。

「邪魔するんやったら帰って」

ドアの向こうから投げやりな声が聞こえた。

「はい」

邪魔するのはよくないもんね。帰ろうか。

「ってあほかあああああ！！」

なんでRPGの世界で吉本ネタが出てくるんだよ！！ 関西人以外わかるのか！？

「やめよ、作者が関西人だつてばれちゃう」

メメタあああああ！！

「ってそうじゃなくて、僕ら神戸……、じゃなくて城下町の学者さんから紹介されたんですけど」

「紹介？ 紹介状はあるのか？」

紹介状？ あああれのことか。

「ありますけど」

するとドアが開いてメイド服を着た少女が出てくる。

「カンベ様の紹介でこられた方です。あるじの下へご案内するであります」

サイボーグみたいに淡々と話す。妙にテンプレがかったしゃべり方だし。てかあの人カンベさんで良かったんだ。

「こちらであります」

メイド？ にあるじとやらの部屋に案内される。

「だんな様、客人であります」

「合言葉は？」

「ゆつて いみや おうきむ こつほ りいゆ うじとり やまあ

きらへ へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

ペペペ ペペペ ペペペペ ペペ

復活の呪文!?

「よろしい、入りたまえ」

メイド? に連れられ部屋に入る。

「うわぁ……」

「オーバーテクノロジー過ぎない?」

姉弟そろって驚嘆の声を上げる。だってさ、剣と(無いけど)魔法の世界じゃなか。だからさ、びつくらこいたわけ。

GSh-6-30があれば……。

「こっ君詳しいね、ミリオタになったの?」

「いや、峰子さんの受け売り」

「ですよー」

—世界史教師が平気に詳しい分けないじゃないか。好きな人もいるだろうけど、生憎僕はそこまで惹かれない。

「紹介状は本物のようだな」

カンベさんの友人と聞いていたから年配の方がくるかと思ったが、現れたのは40歳ぐらいの不精ひげを生やしたいい男だった。

「俺はリッキー。機会技師だ」

いい男はそう名乗る。って機会技師? 魔法使いた的なのではないのか?

「魔法はとづくに滅んでる。今この世で魔法を使うとしたら冥界の住民ぐらいだろう。だがその代わりとっては何だが、俺は工学をマスターした。そいつも俺が作りし兵器むすめさ」

ガトリング砲のことを娘という。この人大丈夫か?

「冥界に行くため旅してるんだって? カンベの爺さんからの紹介だからな。特別に協力してやる。着いてきな」

リッキーさんに連れられて地下に行く。何があるんだか……。

現代兵器はRPGでは使えるのか？

かつて神というラスボスがチェインソーという人間の知恵の産物によって瞬殺されるといふRPGがあっただけど、

「これ、僕らいらなくね？」

「私も同じ感想を持った……」

ガトリングにバズーカに爆雷に……。ここは本当にファンタジーの世界だろうか。夢もきぼーもありゃしない。

「だがこの子らはアンタらがやすやすと使えるもんじゃねえ。持つてみな」

リックキーさんに言われて試しに持つてみる。

「つて重っ！ こんな扱えないよ！」

あまり力に自信がある方じゃないけど、一応大のオトコである僕で持てなかった。

「うわっ……、なんなのこれっ！ 現実世界の数倍の重さよっ！」
姉さんは言わずもがな。

「これでも最低限必要なバーツ使ってた。まだまだ軽量化なんて言ってられねえよ」

どう考えてもオーバーテクノロジーだから……。それぐらいの制約はあるか。

「アンタらはこっちだ」

そう言っつてリックキーさんは僕らをより地下へ誘つ。

「これだ。持つてきな」

地下に案内したリックキーさんは、僕らに球体を見せる。

「爆弾……ですか？」

「アンタらの世界ではそういうのか？ これは俺が極秘に開発した

リッキーボールだ」

リッキーボールと呼ばれるそれは、

「これ、モンスターボールだよな？ しかもハイパーボール……」
制作者の妙なこだわりがあるのだった。

「これどうするんですか？ さっきの殲滅兵器の方が凄そうですが
……」

「甘いなアンちゃん。ものの価値はでかさだけじゃねえ。コイツの
真骨頂はそうだな、実際に外に出て確かめてみつか」
どうやら自信があるようだ。

『あじゃあじゃあじゃあじゃあ！！』

久々登場リキシ。相変わらずの厚化粧だ。

「もちつと強い方が映えるんだが仕方ねえ。超芸術的爆発を見せて
やんよ」

そう言っつて彼は、

「リッキーボールタイプS！」

大きく振りかぶってそれを全力で投げる。

『あじゃあじゃあ……ZZZ……』

「眠った!？」

「まさかラリホー？」

「なんだあ、ラリホーって？ リッキーボールタイプSだよ」
S＝スリープか。

「こんなもんじゃないぜ！ リッキーボールタイプF！」

誰得な寝顔を見せながら眠ってるリキシに投げられたリッキーボ
ールは、当たったと同時に燃え上がる。

「F＝ファイアとかフレイムとかその辺だよな」

「まだまだあるぞ。ただ消耗品だからな、魔法と違って回復できないのが痛いな。この世界じゃ魔法の代わりになるだろう」

確かにリッキーボールシリーズは様々な効用があるみたいだ。今見せてくれた奴の他にもあるのだろう。

「ひとつ質問。回復用はあるの？」

「回復？ 薬草で我慢しろ」

「「はっ？」」

イマナントオツシャイマシタカ？

「リッキーボールに体力回復の効能はねえ。怪我したら薬草。常識だろ？」

「てことは何？ ホイミないの？」

「ニフラムとかザキは無理があるなとは思ってたけど、回復も消耗品とは……」

「「どうしましょ」」

タダでさえお金を稼ぐのが大変な世界なのに、薬草を優先的に買わないといけないとか……。

「でもそんな心配いらないぞ？ こっから西に行つたところに薬草園つて所がある。そこでローズの婆さんが品種改良した薬草を育ててるんだ。事情を話したら貰えそうだけどな」

「薬草園？ 近いの？」

「まあ少し歩くが、でも水の紋章がある大王イカの祠もそっち側だ。ちよつと良いんじゃないか？」

水の紋章か。大王イカの祠ってもうボスがどんなのか分かったんだけど……。

「意外とイカ娘みたいなのもしれないんじゃないか？」

「雑魚キャラがリキシの時点でそれはないよ」

「なに言ってるんだ？ まあ良い。餓別だ、持ってけ!!」

リッキーさんはそう言っけてリッキーボールを投げて

「あっ、オンのままだわ」

チュドーン！

漫画みたいな効果音とともに爆散する。……、爆発は計画的にお願ひします……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4322t/>

姉が過去からやって来たけどRPGの世界に行っちゃった。

2011年6月30日23時08分発行